

志高・私市・篠・上人ヶ平

堤 圭 三 郎

京都府埋蔵文化財調査研究センター設立10周年の記念論集の刊行にあたり、その主題が設立後10年間に調査した主な遺跡を中心とすることになったことを知り、何か書かねばといつも気になっていた。主題になった遺跡は、舞鶴市志高遺跡、綾部市私市円山古墳、亀岡市篠窯跡群、木津町上人ヶ平遺跡であるが、それぞれについて調査の契機やその結果に関する所見を述べることにしたい。

1 志高遺跡

まず、舞鶴市志高遺跡は、京都府北部を流れる由良川の自然堤防にある遺跡だが、明治の大洪水までは志高百軒と呼ばれるほどの集落があったということである。由良川の治水のために、建設省が川幅をひろげる工事を行うことになり、事前の発掘調査を実施することになった。



第1図 志高遺跡

由良川流域では、古くから川底の土砂を採集する工事が行われており、砂利船と呼ばれる船

が河口付近に停泊し土砂を掘り上げている風景がよく見られた。掘り上げている土砂の中から最初に縄文土器を発見されたのが地元在住の故矢田悟郎氏であった。同氏は採集の遺物を携行し、当時京都学芸大学教授故小江慶雄氏に報告された。小江教授が現地調査のうへ、遺物発見の経緯を報告されるとともに採集遺物について論究されたのが、由良川流域の縄文時代遺跡の最初のものとなっている¹。なお、矢田氏が採集された遺物は、京都国立博物館と舞鶴市郷土資料館に保管されている。

当時、川底に遺跡があることがわかって、それを調査することはとうていできなかった

た。ただ、由良川には縄文時代の遺跡が確実にあるということ、認識するだけだった。ところが、昭和47年に建設省が舞鶴市桑飼下で、川幅をひろげる工事をするようになった。ここでも縄文土器が発見されていたので、舞鶴市教育委員会と財団法人古代学協会が事前に発掘調査を行うことになった。この調査が由良川流域における最初の調査である。調査の結果、縄文時代晩期の住居跡をはじめとして、打製石斧など多量の遺物が出土し、由良川流域の縄文時代を知る上で、重要な成果をあげた。²

ひきつづき、大江町三河宮^{そうご}の下遺跡の調査が京都府の河川改修工事にもなって、昭和56年に行われ縄文時代後期と古墳時代の住居跡が多数確認された。³

志高遺跡の調査は、三河宮の下遺跡より早く昭和55年から始まった。この調査も川幅をひろげることが原因であった。志高百軒と言われ、明治時代まで大きな集落があった場所であるから、きっと以前の遺跡もあるだろうと想像して、まず試掘調査をした。試掘調査の主体は舞鶴市教育委員会であった。舞鶴市教育委員会にはそれまで調査を担当する専門職員がいなかったが、この調査をきっかけにして職員の採用がなされた。試掘調査の結果、岡田下橋より上流には遺物が多量に出土することがわかったので、建設省と協議し翌年から本格的に発掘調査を実施した。その後、財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが設立され、国・公社・公団・京都府等が工事を行う時には、同センターが調査を担当することとなったので、昭和59年から舞鶴市教育委員会の調査を引き継ぐことになった。

志高遺跡の調査は、その後昭和62年まで毎年行われ、奈良時代の掘立柱建物跡・弥生時代の貼り石遺構などが確認され、さらにその下層から縄文時代早・前期の多量の土器が出土し、由良川流域における貴重な資料をもたらした。⁵

志高遺跡の調査結果については、この論集の中で調査担当者が詳しく考察しているからそちらに譲ることとして、由良川底からはじめて縄文土器が発見されてから、10年を経てはじめて発掘調査が行われ、30年を経た現在、縄文時代の様子がようやくわかりかけてきたところである。現在同調査研究センターでは、桑飼上遺跡の調査を継続して行っているが、このような調査が行われることによって、古代の様子が少しずつわかってくることはこのうえもない楽しみである。ただ、河川改修のため遺跡の部分の土砂をそっくり削り、取り除くことになっていたのも、弥生時代の貼り石遺構を堤防の下に埋め戻して保存した以外には、その他の遺構を保存することができなかったのは残念であるが、河川改修という工事の性格を考えるとやむを得ないことだろう。

2 私市円山古墳

つぎに、綾部市私市円山古墳は、由良川の中流にあり、川の右岸に張りだしている丘陵

の頂上に築かれた大型の円墳である。東の方に造り出しを備えているが円丘の直径は71mあり、京都府では最大の規模を誇る円墳である。

この古墳の調査は、日本道路公団による近畿自動車道敦賀線の建設工事に伴うものであった。建設計画に先立つ分布調査ではまったく古墳であることがわからなかった。標高約90mの丘陵は、まるで



第2図 私市円山古墳

自然の小山のように見えた。ただ、頂上がいづらか平坦になっていたのも、ひょっとして中世の砦であったのかもしれないと考えて、試掘調査をしてみることにした。試掘調査の結果、頂上から経塚が見つかり、斜面には葺石・埴輪があることがわかった。しかもその規模は、これまで由良川流域では見たこともないほど大きいものだということがわかった。

さっそく日本道路公団と調査経費や調査期間について協議を行い、昭和62年11月から昭和63年12月までの延べ14か月間を費やして発掘調査を実施した。

調査結果の詳細は、この論集の中で調査担当者が詳細に述べることになっているので、ここではごく簡単に報告したい。すなわち、古墳は自然の丘陵を利用して築かれた直径71mの円墳で東側に幅18m、長さ10mの造り出しを持つ、いわゆる帆立貝式の古墳である。斜面には葺石が貼られ、埴輪が巡らされていた。墳頂部平坦面に3基の埋葬主体部があった。主な出土遺物は、鉄製甲冑・刀剣・銅鏡・玉類であった。古墳の外形・規模・構造・外部施設・主体部の構造・出土遺物等から総合的に判断して、築造の年代は5世紀中頃すなわち古墳時代中期と考えられる。⁶

由良川中流域すなわち、今の綾部・福知山盆地ではこのように大規模な古墳は知られていなかった。古墳時代中期の古墳としては、綾部市菖蒲塚・聖塚古墳、福知山市妙見古墳がその代表的なものと言われていた。これらはいずれも中型の方墳であり、丹波地方の特色と考えられている。大型の帆立貝式古墳である私市円山古墳が発見されたことで、丹波地方の古墳時代の考察に新たな視点が加えられることになった。

このような観点から、地元綾部市の綾部史談会をはじめ多くの市民から、私市円山古墳を保存してほしいという希望が寄せられた。平成元年3月26日には綾部市中央公民館で、約250人が参加してシンポジウム「私市円山古墳」が開催され、保存への期待がますます

す高まった。このような府市民の保存に対する期待に応じて、日本道路公団では古墳の下にトンネルを掘り、道路を建設するよう計画を変更するとともに、綾部市では古墳の部分の土地を買い上げて保存することになった。遺跡の保存と開発事業との調整がはかられた典型的な例として、関係者の努力に心から敬意を表したい。

3 篠窯跡群

亀岡市篠窯跡群の調査は、京都市西京区杵掛から丹波町須知までの延長35kmに及ぶ国道9号線バイパス建設に伴うものであった。最初は全線を建設省が計画したが、後に杵掛・亀岡間すなわち、篠窯跡群の部分は日本道路公団が工事を担当することになった。計画の当初、建設省京都国道工事事務所が行う遺跡の分布調査に、京都府教育委員会が協力することになり、私が担当することになった。



第3図 篠窯跡群

篠窯跡群の存在は古くから知られており、昭和30年には安井良三氏によって、王子の瓦窯跡の発掘調査も行われていた⁸。その後、京都府教育委員会では遺跡地図作成のため昭和43年に窯跡の分布調査も実施している。しかし、新しい道路を建設することになればさらに詳しい調査が必要であるから、道路計画の予定地を含め幅200mの範囲を丹念に歩くことにした。

分布調査を開始したのは昭和48年7月のことであり、山の木木が茂り、下草が繁茂した時期であった。道路建設の担当者と埋蔵文化財の担当者がいっしょに遺跡の分布調査をするのは、まったくはじめてのことであり、多分最後のことであったと思う⁹。したがって、土器の破片を発見したり、窯跡の灰原を見つかったりした時には、その意味を詳しく説明し、大梯尺の地図に正確な位置を記入していった。夜には旅館で遅くまで歴史や文化財の話をし、道路建設の苦労話を聞いた。道路建設では、地図の上で道路の計画を立てるのが一番楽しいことや、用地買収が終われば道路は90%完成したようなものだと言うような話を興味深く聞いた。

篠窯跡群の調査の初期の段階で注目されたのは、黒岩窯跡であった。黒岩窯跡は一辺が約1.8mの三角形をした小さな窯跡であり、三角形の二つの頂点に焚口を設け、他の一つの頂点に煙出しのあるもので、これまで確認されたことのない特殊なものであった。窯の内部に数個の緑釉陶器が完全な形のまま残っていた。この窯は、釉薬を掛けた高級品を焼いたものであることがわかった。¹⁰

昭和52年の黒岩窯跡の調査を始めとして、前山窯跡・小柳窯跡・西長尾窯跡・石原畑窯跡・芦原窯跡など18基の窯跡を調査した。窯の本体を確認することはできなかったが、灰原や焼土が確認されたのは、さらに多くの地点にのぼった。

発掘調査が終わった地点から工事が進められ、沓掛・千代川間が開通したのが昭和63年であったから、最初に、道路建設計画に伴う分布調査を行ってから道路が完成するまで15年が経過したことになる。

この間、道路建設工事の担当も建設省から日本道路公団にかわり、発掘調査の担当も京都府教育委員会から財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターにかわった。建設工事の担当者ももちろんつぎからつぎへかわったが、発掘調査の担当者も実に多くの人を数えることになった。発掘調査を担当した人の中には、現在他府県や京都府内の各市教育委員会で活躍している人もいる。

15年に及ぶ発掘調査によって出土した遺物もまた多量にのぼっている。整理箱で約3,000箱に及ぶ土器片は、調査の期間中には現地に建てたプレハブに保存されていたが、現在埋蔵文化財調査研究センターの収蔵庫に移したため、収蔵庫がいっぱいになってしまった。出土遺物は、たとえ小さな破片でも一点一点ごとに、水洗いし出土地点や出土年月日を記入して保存しているが、それらの大部分を丹念に観察した結果をまとめた報告書も、すでに刊行されている。¹¹出土した遺物は、老の坂を越えた京都即ち、平安京で消費されたものであり、大都市の生活に欠かせぬ大量の食器を生産した遺跡として、篠窯跡群のもつ歴史的な意義は特に重要である。

このような歴史的な意義を説明し協議を重ねた結果、日本道路公団では工事に当たり可能な限り窯跡を保存するよう配慮して頂いた。しかし、露出したままの保存は、現在の保存技術では困難であったので、すべて埋め戻した状態になっている。今回の調査で窯跡の本体を確認したのは、わずかに18基であったが、篠窯跡群は100基以上あるいは数百基に及ぶものと推定される大規模な窯跡群であるから、道路建設に関連して保存された数基の窯跡をはじめとして窯跡群全体を調査し、まとめた地域を永久に保存していくという新たな課題が生じたと言えよう。平安京という大消費地とその背後にある生産地との関連を理解するためにも、篠窯跡群の保存は重要な課題であると言える。

4 上人ヶ平遺跡

相楽郡木津町にある上人ヶ平遺跡は、住宅・都市整備公団による木津東部地区開発事業に伴う事前調査によって発見された。木津東部地区の開発計画に先立ち昭和54年に遺跡分布調査を実施した結果、地区内に41か所の遺跡が確認された。¹²このうち鹿背山城跡は現状のまま保存することにし、その他の遺跡は事前調査の結果によって、保存方法を検討することになった。



第4図 上人ヶ平遺跡

上人ヶ平遺跡の付近には、古くから市坂古墳の存在が知られていた。分布調査の結果、市坂古墳の周辺にさらに幾つかの小さな古墳があることがわかった。事前の発掘調査は、まずこれらの古墳から着手した。古墳の周辺で瓦を確認したが、全面的な調査は土地所有者の了解が得られず、次年度以降に持ち越された。昭和63年度と平成元年度に全面調査を行ったところ東西9間・南北4間の掘立柱の建物が4棟整然と並んで検出された。柱の大きさはそれほど大きくないが、建物は東西26m・南北11.5mと大規模であることからこの建物跡は瓦を焼くときの工場の跡ではないかと考えた。この台地の斜面には、市坂瓦窯跡と呼ばれる平城宮に使われた瓦を焼いた窯跡が既に確認されていた。

今回の調査で市坂瓦窯跡のある斜面の上部にひろがる台地から、工房と思われる建物跡が検出された。工房跡と考えたのは、建物の平面的な大きさに比べて、それぞれの柱の大きさが小さいことである。付近には、粘土をこねるための穴もあり、それには古墳の周濠を利用していただこともわかった。粘土を採集していたのではないかと考えられる谷状の窪みも発見され、この台地一帯が瓦生産に関する一連の工程を司る地域であることが判明した。しかも、ここで焼かれた瓦は、聖武天皇が恭仁宮から平城宮へ遷都した時の整備工事に用いられたものと考えられている。

実際に瓦を焼いた窯跡は、あちこちで発見されているが、その瓦の生産に当たった工場の全容が明らかになった例は今回の調査結果がはじめてである。しかも、平城宮の瓦を焼いた窯跡とその工場の発見である。特別史跡平城宮跡は、完全に保存されているが、その建設に大きく関わった瓦工房跡の保存を要望する声が高まるのは当然のことである。マス

コミをはじめとして、地元住民の間から現状保存の期待が寄せられている。しかし、遺跡の現状は、小さな柱の穴が点在しているだけである。高松塚古墳のように石室があり、壁画が発見されたわけでもない。長屋王邸宅跡のように文字に記された資料が出土したわけでもない。この地味な瓦工房跡のもつ歴史的な意義の重要性を、どのようにして理解してもらうか、その保存が今後の開発にどんな影響をもたらすかを、開発関係者に説明することに目下苦慮しているところである。文化財の保存と国土開発工事との調整は、いつの時期でも非常に困難な課題である。その困難を乗り越えて、遺跡の保存が決定したときの喜びは、また格別である。今後とも住宅・都市整備公団と協議を重ね、お互いに納得のいく結論が得られるように努力していきたいと考えている。

5 おわりに

これまで、センター10周年記念論集の主題となった四か所の遺跡について、調査の契機や結果の一端を述べたが、重要な調査成果が得られた場合、それをどのようにして保存し後世に伝えていくか、多くの困難を抱えている。特に、民間の開発工事によって発見された場合には、いっそうその感が強い。

京都府内では年間約1,600件の発掘調査が行われている。小さな試掘調査から広大な面積の調査まで、その規模はさまざまであるが、一年中いたるところで発掘が行われている。その大部分は開発工事に伴う事前調査であるが、調査終了後ほとんどの遺跡が削平されてしまう。何らかの形で保存され後世に伝えられる遺跡は、ごくわずかである。遺跡を保存し、もとあった形に復元し活用することは、わが国の歴史を理解し、将来への方向を見きわめるためにも、欠かすことのできない大切なことである。一つでも多くの遺跡が保存され、活用されるように努力していきたいと考えている。

(つつみ・けいさぶろう＝京都府教育庁指導部文化財保護課長・当センター理事)

- 1 小江慶雄「舞鶴市八雲地先由良川河底出土の先史遺物について」(『京都学芸大学紀要』A-21) 1962年
- 2 渡辺誠ほか『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』(舞鶴市教育委員会) 1975年
- 3 竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』 京都府教育委員会) 1981年
竹原一彦「三河宮の下遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第2冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1982年
- 4 杉本嘉美「志高遺跡調査概要」(舞鶴市教育委員会) 1981年
吉岡博之「志高遺跡」(舞鶴市教育委員会) 1982年
吉岡博之・西岡成郎「志高遺跡」(舞鶴市教育委員会) 1983年

- 5 肥後弘幸・岩松保・三好博喜・田代弘・吉岡博之・長谷川達ほか「志高遺跡」(『京都府遺跡調査報告』第12冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989年
- 6 鍋田勇・石崎善久ほか「近畿自動車道敦賀線関係遺跡—私市円山古墳」(『京都府遺跡調査概報』第36冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989年
- 7 梅原末治「多田村方形墳」(『京都府史蹟勝地調査会報告』1 京都府) 1919年
中村孝行「聖塚・菖蒲塚試掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第11集 綾部市教育委員会) 1984年
- 8 安井良三「丹波篠村A号瓦窯址」(『京都府立亀岡高校研究紀要』4 京都府立亀岡高等学校) 1956年
- 9 堤圭三郎「国道9号バイパス関係遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1976)』京都府教育委員会) 1976年
- 10 安藤信策・吉水真彦・樋口隆久「国道9号バイパス関係遺跡昭和52年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1978)』京都府教育委員会) 1978年
- 11 水谷寿克・石井清司ほか「篠窯跡群Ⅰ」(『京都府遺跡調査報告書』第2冊) 1984年
水谷寿克・石井清司・引原茂治・岡崎研一ほか(「篠窯跡群Ⅱ」(『京都府遺跡調査報告書』第11冊 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989年
- 12 長谷川達「山城南部地区遺跡分布調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』京都府教育委員会) 1986年
- 13 石井清司・伊賀高弘「平成元年度上人ヶ平遺跡の調査」(『京都府埋蔵文化財情報』第36号 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990年